
車酔いの少女

げんたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
車酔いの少女

【Nコード】
N3145Y

【作者名】
げんたろう

【あらすじ】
読書大好き女の子と、大人びた隠れチートな男の子の、ちょっと恋愛風味な学園モノになる予定です。にぎやかしの脇役を後ほど投入予定。

バスで読書に夢中なクラスメイトは、男の子の視線にちっとも気付きません。気付いた後の彼女は・・・？

車酔いの少女1 (前書き)

初投稿です。宜しく願います。

車酔いの少女1

毎朝同じバスにのる女子生徒がいる。

調査したところ、水野かなめ 中3 E組。

彼女は毎朝ブックカバーをかけた本を読みながらバスに揺られ、バスから降りるとフラフラと校舎に入る。

E組の前を通ると、親しい友人と話し込んでいる彼女をたまに見ることが出来るが、本を読む姿はバスでしか見ることができない。

そんな水野とは3年になって同じクラスになった。

毎朝バスで逢うのはいままで通り。

だが、彼女は俺に気づかない。バスの中での彼女の視線はいつだって本だ。

バスから降りるとフラフラと校舎に入るのもいつもの通り。存在感がないとは言えないと思うのだが、いつまでたっても俺に気づかない。

4月のある日。

日直だった俺は、いつものバスから降りたあと部室ではなく教室へ向かった。

同じバスに乗っていた水野も教室に向かうものと思っていたのだが・

・・彼女は反対側の棟にフラフラと向かっていく。

日直の仕事をこなしていくと、ちらほらとクラスメイトも通学してきた。

水野の姿は、ない。

そしてホームルーム直前に「おはよう」と言いながら水野がクラスに入ってきた。

「おはよ。なに？またギリギリ？」

「おふとん、気持ちよすぎるんだもん」

「あははー。気持ちはわかるけどねー」

などとクラスメイトといい交わしながら着席する水野。

おかしい。

毎日ギリギリなはずがない。早朝、始発のバスで彼女は学校に来ているのだ。

ホームルームが始まるまでの1時間と少し。一体何をしている？

俺は翌日、彼女を尾行することにした。

始発のバスに乗り込むと、相変わらずブックカバーをつけた本を読む水野。

ハードカバーに布製のブックカバーとは珍しいな。

バスから降りると相変わらずフラフラと校舎に入り、やはり逆の棟

に向かっている。

行先は……。

「すみません、休ませて……ください」

「またなの、水野さん」

呆れ顔で言ったのは校医。

「バスで本を読まなきゃいいのに」

「だって、ヒマなんでもん……」

「酔ってりゃ世話ないわよ。教室で読んだら？」

「なんででしょう、机だと読む気が起こらないんです。バスとかベツドとかなら……」

「まあ、気持ちは分かる気がするわ」

なるほど。

空白の一時半は保健室で寝ころがりつつ、読書をしていたわけか。フラフラしていたのは、車酔いが原因。

中々楽しませてもらったぞ、水野。

謎が解けて。

俺の水野への関心は消えたかと思ったのだが・・・。

バスに乗ればまず水野を探すし。

フラフラと校舎に入る水野を観ると、なんとなく笑みが浮かぶ。

さて、お前はいつ俺に気づくんだろうな？

車酔いの少女1（後書き）

男の子の名前が出ていないことに、チェックしていて気付きました。
次は多分、出ます。

車酔いの少女2

「あれ？」

「水野か。休日に図書館とは感心だな」

「買うほどに小遣いがあるわけじゃないからさー」

気分を変えて市立図書館で勉強でもしようかと足を向けると。そこでクラスメイトの水野とあった。

同じバスで通学しているわけだから、同じ図書館を利用している確率も高いわけだ。

が、立海の図書館は蔵書もかなり充実している。市立図書館になにか利でもあるのだろうか？

聞けば『思春期の微妙な乙女心だよ・・・』と水野はつぶやいた。

「どういう意味だ？」

「本読むっていうの、あんまり知られたくないかなー・・・って」

「いい趣味だともうが・・・」

「本読んでいると友達ともおしゃべりできないし、『真面目』とか言われそうだし。私おしゃべりも好きだし

真面目でもないし、誤解はされたくないなー・・・って」

「クラスで孤立する可能性もあるからか」

「・・・ズバっといえますね、森川君」

まあ当たり前だけどね。と水野は言った。

「だが、もう15歳だ。そのような幼稚なことは誰もしないだろう」

「分かつてはいるのですが、ね。既定観念が抜け切れないのです」

水野はそう言うと『それじゃあね』と検索ルームへ向かった。俺はなんとなく後を追う。

「・・・こつちに用事？」

「そうだな」

「ふーん？」

水野は小さなメモを取り出すとキーボードで打ち込んでいく。ブラインドタッチとは・・・あなどれないな。

そしてレシートを出力するとカウンターへ持っていく。どうやら本の検索をしていたようだ。

司書から本を5冊受け取り「再来週の土曜日までです」と言われた彼女は、エコバックに本を詰め込み

「それじゃあね」と俺に声を掛け、帰ろうとする。

「まで」

「?なに？」

「なにを借りたか興味がある」

「・・・」

水野は無言でトートバックを突き出した。

「オヨヨ大統領・・・？」

「い、いいじゃない！」

崇高な本かと思いきや。

かなり昔の娯楽小説だった。本は手垢でボロボロで、彼女はそれに

ブックカバーをかけるのだろう。
バックを水野に返すと「重いからもう帰るね」と彼女は再び俺に背を向けた。

2週間後。

「また逢ったな、水野」

「すごい偶然だね？」

偶然ではない。

バスで彼女の読書進捗をチェックし、今日返却すると計算したのだが・・・相変わらず俺に気づいていない
水野には『偶然』でしかない。

「面白かったか？」

「まあこんなもんかなー、って感じ。やっぱり時代設定とか古いし」
「なるほどな」

彼女はカウンターに本を返却すると「じゃ、私はこっちだから」とパソコンルームに向かい、俺は当然後を追った。

再びメモを取り出した水野は、相変わらず見事なブラインドタッチで蔵書を検索している。

後ろでそれを見ていると、今回はまた別のジャンルらしい。

「ピカソ・ゲルニカの真実、キリストとアイコン、アールヌーヴオの世界、曼荼羅と仏たち・・・」

「！ 何見てるのよ、森川君！」

この二週間で水野にどんな心境の変化があったのだろうか。
芸術に興味があるとは思わなかったのだが・・・データ不足か？

水野はプリントアウトすると、司書に貸し出しをお願いする。
俺は本待ちの水野の横で、なんともなしに一緒に待っていた。

「じゃ、私帰るね」

「まで」

「・・・もう何を借りたか見たじゃない」

「荷物が重いから帰るといいうなら、俺が持ってやるわ。少々質問がある。時間をもらおうぞ」

「・・・（強制！？）」

そして一階のロビーの椅子で、俺達は体面して座った。

「なぜだ」

「は？」

「前회가オヨヨ大統領。今회가宗教美術。お前の思考回路が知りたい」

「・・・いや、別に。意味ないけど」

「だが、メモを持参していたということは、どこかで何かがあったはずだ」

「尋問するほどの理由じゃないけど・・・」

「ほう。なにか理由はあるのだな？ 聞かせてもらおうか」

「・・・今度、ピカソ展が美術館であるから下準備しようか」

なつて……。ついでだから美術系で
まとめようかなーって思ったら、ミュシャ好きだし。イコンは以前
なんかの本で読んでて、曼荼羅は中学の修学旅行で東寺で……。っ
て思い出したから」

水野のなかではきちんと理由があったらしい。

俺は満足して水野を開放した。

水野は訳がわからないといった顔をしながら帰途についていった。

さらに二週間後。

「やあ、水野」

「……もう偶然じゃないね。クラスメイトの観察日記でもつけて
るわけ？」

さすがに分かったようだが、ちょっとズレた返答が来た。

「……ふう、もう何でもいいよ」

水野はカウンターで本を返却し……。今回は書架のほうへ向かった。
俺も後を追う。

ついた先はスポーツコーナー。

「今度はスポーツか」

「……まあね」

木城はグルリ、と本を見渡すと俺に言う。

「バスケの分かりやすい本選んでくれる？」

ほんのちよつと耳が赤い。

俺はそれを確認してから、書架に手を伸ばした。

車酔いの少女2（後書き）

苗字だけ出ました！ 森川君です。
で、バスケット部のようです（分かりにくいですが）。

車酔いの少女3

俺は水野と付き合うことになった。

が、日常にたいした変化はない。彼女は公表を拒み、その理由が尤もであったため、俺も了承した。

俺と水野は毎日メールでやりとりをし、クラスでアイコンタクトを交わし、二週間に一度図書館デートをする間柄である。

その日も始発のバスに水野は乗っていた。

俺はそれを確認し、彼女がテニスのルールブックを読んでいるのを横目で見る。

確認していないのだが、彼女は俺が同じバスに乗っていることにいまだ気付いていない気がする。

いつもなら彼女は附属校前で降りるはずだったが、彼女は5つ前の公園前で降りた。

俺はとつさに反応できず、バスは再び動き出し・・・ほんのすこしの逡巡後、俺は次のバス停で降り、逆走して水野を探した。

彼女は公園のベンチに横たわっていた。横にはミネラルウォーター。

「水野！ どうした!?!」

「う、うう……？ なぜごにぼりがわ（もりかわ）くんが……」

バス酔いか。そしてやはり俺に気付いていなかったのか。

今日はいつもよりひどいらしく、途中下車したようだ。

俺は、水野の額に手を当てる。

少し、熱い。

「熱があるぞ」

「うう。やはり……。だから、だえぎれないほどきもちわるいわ
けっすね……」

水野は横になったままバッグを漁り、解熱剤を取り出し、ミネラル
ウォーターで飲んだ。

「お前は薬を常備しているのか？」

「偏頭痛持ちだし、頭痛薬と胃薬は……」

ペットボトルを米神にあてながら、水野は言う。

「よし、復活した。もう歩ける。……心配させちゃったね、森川
くん」

「たいした事がないなら気にしなくていい。復活が早くないか？」

「吐いたし。スッキリした」

「……（吐いたのか）」

俺達はそのまま学校へ徒歩で向い、俺は遠慮する水野を説き伏せて
保健室に同行した。

「車酔いで吐いたようです。少々微熱もあるようでした」

「そう。ご苦労様、森川君」

「いえ。このまま帰らせますか？」

「そうねえ。また車酔いするのがオチだろうし・・・しばらく休ませて様子を見ましょうか」

水野もトンボ帰りでバスに乗りたくないらしく、しきりにコクコクとうなずいている。

「それじゃ、あとで様子を見にくるぞ」

「は？」

「あら？ フッフ・・・？」

水野が妙な声を出し、保険医が意味深な声を漏らした。

二人の声を無視して朝練に向かう俺の背に二人の会話が聞こえる。

「お薬は？ 飲んだの？」

「ハイ。飲みました」

「胃薬は？ あなた市販の薬飲んで、直ぐに胃を悪くするんですよ？」

「・・・飲みます」

「コレで最後じゃない。ちゃんと処方してもらいなさいよ」

「う、ういゝ」

朝練を終えて保健室に行くと、水野はベッドの中で本を読んでいた。俺に気づいて本を布団に隠したがバレバレだぞ？

「だいぶ良くなったようだな」

「うん。解熱剤飲んだし。朝はご迷惑おかけしました。すみません」

「かまわない。・・・で、お前は早退するのか？」

「やー、授業でるよ？」

「ムリしないほうがいいと思うが・・・」

「1 授業333円。1日2000円」

「？」

「現金還元されるわけでもないのに、ハードカバー1冊以上の授業料をムダにするのは勿体無い」

珍しい考え方だ。

「薬を飲んでいるのだから、眠くなるのではないか？」

「『3冊本が買える』って念じれば眠気は吹っ飛ぶから、ヘイキ」

そういつて水野はノソリと起き上がった。

「頭痛は昨日、ネットしすぎたからだし。吐いたのは車酔いだから」

「だが、熱があったぞ？」

「森川くんしつこいね。自己暗示って知ってるでしょ？ 思い込んだら試練の道なのよ」

意味がおかしいぞ、水野。

「水野さん、あなたは平気でもクラスメイトにうつるかもしれないでしょ？ しばらく寝て、お昼頃には帰宅しなさい」

保険医も呆れたように水野に忠告する。

「授業が遅れるのがいやなら、あとで友達にきけばいいじゃない」

「そうだぞ、水野。なんなら俺が教えてやる」

「森川君は部活とか忙しそうだからいいよ」

彼氏である俺の申し出をアッサリと却下する水野は「仕方ないかなぁ」と布団にもぐりこんだ。

「そうそう。本読んでもいいから横になってなさい。それでも随分違うのよ？」

「はあい」

水野は布団に隠していた本を取り出すとページを広げた。

ブックカバーに隠れたタイトルを見ることは出来ないので、俺は水野から本を取り上げた。

「初めてのバスケ 応用編・・・か」
「う」

ブックカバーをはずすと、図書館所有の印であるタグがない。ということは水野の私物である可能性が高いな。

「初心者に応用編は難しすぎるのではないか？」

「ちゃんと初級用から読んだもん」

「読むだけでは分からないことも多い」

「森川くん、近頃の図書館ってすごいんだよ？」

ブックカバーを元通りにし、水野に返すと反抗的なセリフが戻ってきた。

「月×バスケのバックナンバー見たよ。森川くん、写真映り悪いね！」

「……………」
「どこその部長がジャーニーズか！ってくらいキラキラ映ってたけど。なんて名前だったかなあ〜？」

「……………」
「本当に背景がキラキラしてた。エフェクト効果っていうんだよね、ああいうの。本人のリクエストかな？」

「……………」
「それでね。そろそろバスケ部に入部しようかと思って！」

「……………」
「あー、うんうん。森川君の言いたいことはわかるよ。十段階評価で3の私がバスケ部に入っても3日ももつわけが無いだろうなーとか思っているんでしょ？」

「ウチの運動部はハードだからな。水野には酷だとは思っ」

「うん。私もムリだとおもう。握力もヒトケタだし」

「幼稚園児並みだな。ちなみに俺の握力は65だ」

「わー。今度リング潰してみせてよ」

「断る」

「……………」
「ま、バスケ部には入部するけど、ラケットを振らないでいい業種があるでしょ？」

「マネージャーか」

「そう！ 今日のお昼休みに出す予定なんだ〜」

「しかし、入部届けを出した当日に熱で休み、というのはイメージが悪いのではないか？」

「そーだよねえ」

水野は本の間から入部届らしき封筒を取り出した。

俺はその封筒をサツと奪うと、表に書かれた文字を読む。

「『女子』 テニス部 御中」

「……俺が顧問に渡しておいてやるっ」

「森川くんが？」

「ああ、顧問とも顔見知りだ。水野のことだ。決心が鈍る前に提出
したいだろう。任せておけ」

「わー。ありがと！ これで心置きなく早退出来るよ！」

ニコニコと微笑む水野に少し心が痛むが……。

そして、俺は水野の入部届けを顧問に提出しに向かった。

翌日

「おはよう、ゆりかちゃん。顧問の先生何か言ってた？」

「え？ 何を？」

「何をつて……ゆりかちゃんバスケット部の主将でしょ？ 昨日ね、

入部届けだしたんだよ」

「あんだ昨日休んでたじゃん。しかもバスケット部に入部届けって・・・運子のアンタが・・・脳みそ沸いた？」

「早退だもん。入部届けは森川くん経由で顧問の先生に渡しているはずなの。部員じゃなくてマネージャーだけど」

ガタン！

海野ゆりか 女子バスケット部主将・水野かなめの親友、が立ち上がった。

「ばつつつつかじゃないの、あんだ！」

「えええええ！？」

「森川秀司に！ 『生徒会書記』に！ 『男バスの軍師』に！ 『彼氏』に！ バスケ部マネージャーの入部届けを預けた！？ あんだ、まっちがい無く男バスのマネージャーになってるよ」

周囲に気を使い「彼氏」の部分だけは小声だが、「！」がつくほどには念入りにゆりかは言った

「えええ！ い、嫌だよ、男の子の、しかも男子バスケット部のマネージャーなんてムリだよ！」

「男の群れは避けて通る子だもんねえ、アンタ。でも、間違いなく100パーセントあんだの所属部活は男バスだね」

「ど、どうしよう！？」

「退部とかムリだよ、あそこ。自主退部NGだもん。ミーハーで入

「た子は即刻退部&コート付近の通行禁止だけだねー。アンタ、演技でもミィハー出来ないっしょ？ サボりも出来ない性格」

「う、うう・・・」

「男バスに骨をうづめるのね」

車酔いの少女3（後書き）

むりやりっぽいですが、名前だしました。秀司君しゅうじです。そして、『隠れ彼氏』の陰謀により、男バスのマネージャーになりました、ヒロイン。

次は愉快的バスケット部のメンバーが出てきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3145y/>

車酔いの少女

2011年11月7日13時09分発行